

## 平成22年度能美市地域福祉活動計画

### 第2回アクションプラン推進協議会及び第2回評価委員会

日時：平成22年8月24日（火）午後7時30分～

場所：辰口健康福祉センター

出席者：高塚亮三（福祉施設等）、西川方敏（市ボランティア連絡協議会）、井上徹（市民生委員児童委員協議会）、吉田良（市自治公民館協議会）、喜多泉（子育てに関わる団体）、田中邦一（学識経験者）、村上洋子（学識経験者）

欠席者：宮田明（市自治公民館協議会）、橋場里志（市自治公民館協議会）、近藤沙夜里（子育てに関わる団体）

事務局：宮本会長、宮田事務局長、新川、海道、向、西出、谷

#### 1. 開会の挨拶

高塚アクションプラン（以下「AP」という）推進協議会長

最近、高齢者の問題として、100歳以上の方の所在不明や虐待が世間を騒がせている。特に高齢者の虐待は、一部の問題として扱われているが、決してあってはならないことである。昨年度、能美市では、虐待が6件あり、身近には起きないということではないので、それに対し、どう発見し、どう対応していくか、課題としている。H18年4月に高齢者虐待防止法が施行されているが、この法は、要援護者支援という視点に立ったものであり、このような視点からもAPの推進を協議していく必要があるのではないかと感じている。

暑い日が続き、また晩方でお疲れのところですが、みなさんには、本日も活発な協議をお願いしたい。

#### 2. 各AP委員会からの報告

##### 地域福祉支えあいのしくみづくり委員会

喜多：7月23日に、第2回の委員会を開いた。第1回の委員会の時に、今年度は、ファミリー・サポート・センター（以下、「ファミサポ」という）をどのようなやり方で周知・PRしていくかを協議した。

昨年度は、保育園や地域の公民館での行事、高齢者が集まる機会に出向いて、話をさせてもらった。学童保育に通っている親御さんの中で、ファミサポのことを知らないという方がいると知り、学童保育施設に出向いて、PRすることを決めた。夏休みに入り、学童保育を午前から開き、時間帯を長くしているところなどへ行こうなど、いろいろと考慮し、委員で手分けして何人かで、市内全ての施設を回った。親御さんたちに会えるのは、お迎えの時間であり、来られた時に声掛けして話を聞いてもらう形なので、あまり時間もとれず、広くPRすることは難しかった。それでも面と向って話すことによって、伝わりやすいし、質問されることもあり、興味を持ってくれる。質問の中には母子家庭の方で、夜仕事に出る時に子どもが寝入るまで預かってもらえるのか？という声もあつたりと、いろいろな要望を聞く機会にもなった。

また、ファミサポのPRを進めながら、社会的にもいろいろ言われている、企業での働き方の見直しについても、企業に対し、何か、アクションを起こせないかと協議をしている。現実にはなかなか難しいが、少しずつ働き掛けていき、その際にはいろいろとデータをとって、それを基に話し合えば、有効性が高まるのではないかという意見も挙げた。

#### 私たちのボランティアセンターづくり（以下「ボラセン」という）委員会

西川：8月13日に、第3回の委員会を開いた。第1回目は主に顔合わせであって第2回は、新任委員の方へのこれまでの経過確認となり、第3回からは、委員の自主的な意見を出し合う協議の場となった。

そこでは、昨年度、開催した「ちいきふくしウィーク」でボラセンづくり委員会が、企画したプログラムの中で集まった意見をグループ作業によって整理することにした。その作業過程で、いろいろと委員同士が話し合えて、良い雰囲気になってきている。整理やまとめは、まだ途中で、次回は、またこの続きをする予定であり、これから協議が深まっていくと思う。

#### 地域福祉人づくり委員会

高塚：第1回のAP推進協議会以後、7月6日、8月3日に第2回、第3回の委員会を開いた。これまでAPに挙げていながら、取り上げて来なかった福祉教育を今年度は取り上げようということで協議した。途中経過ではあるが、本日の配付資料の見取図（案）は、第3回目までの話し合いをまとめた図である。最終的なところは、社会福祉法にも謳われているように「尊厳と自立」ということが目標で、そこに到達するまでの過程において、地域福祉活動計画の中で、「福祉教育」というものが、どう、あるべきかを協議している。

「福祉教育」というのは、全てに通じ、支えあい委員会、ボラセン委員会、ネットワーク委員会でも協議の中に含まれている。APの中だけでなく、学校教育の中にも当然あり、今まで手つかずだったのは、学校教育の中の福祉教育とどう連携していくのか、その橋渡しをする人材を見つけることが難しかったということがある。

今年度になって、学校・教育委員会は、そこでの視点で進めていけば良いのではないかと、そして、私たち人づくり委員会では、「福祉教育」というものをどう捉えていくかということの良いのではないかとということになった。

「福祉教育」に通じる協議は、学校や市関係課他、いろいろなところで協議し実践していると思う。それらを見渡しながら、それでいて、制度・システムとして、障害の有無に関わらず、共生でき、網の目から抜け落ちる人がいない仕組みをどのようにつくっていくかという視点で取り組んでいこうと確認した。そういったことから、「福祉教育」の理念や方向性を示すために、各委員からいろいろと意見が出され、協議が深めているところある。

#### 地域福祉ネットワークづくり委員会

井上：地域福祉委員会の設置を推進しているところで、まずは、設置状況を報告すると根上地区においては、吉原町が立ち上がり、全町内会に設置された。寺井地区では、三道山町が立ち上がり、未設置町会は残り1町会となった。辰口地区は、寺畠町と鍋谷町が立ち上がったということである。

次に7月21日に開いた第2回の委員会ことだが、1つ目は、昨年度、作成した「いきいきサロン活動手引書」について協議した。手引書は「いきいきサロン」をあまり知らない方を対象にし、広く周知し、いきいきサロンの担い手にもなれるようにわかりやすく作成したものである。昨年度は、作成はしたが、発行・配付まではしていないため、今年度は、既に、担い手として活動しているいきいきサロンボランティアの方にも活動の充実につながるような内容を少し、付け加えて、広く市民に配付していくこと、また、配付するにしても、なかなか目を通してもらえないことも考えられ、人の集まる機会に工夫して配布することを話しあった。

2つ目には、地域福祉委員会の課題として、「設置はしたが、あまり活動できていない」という状況がある。そこで、「なぜ、動かないのか」「何が支障となるのか」「どう動いていいのか、わからない」など、既設置・未設置を含め、町会からの声を聞き取り、それに対して、助言という形で「地域福祉委員会Q&A集」を作成できないかと話し合った。

また、市内全町会から、いろいろな意見を聞き取ることもできないので、各地区から2～3町会をピックアップして、まとめることや市の広報誌などを活用して地域福祉委員会についての連載記事を企画することなどの意見が挙げられた。

高塚：それでは、各AP委員会からの報告をふまえて、何か意見・質問などあるか。

田中：報告に対する意見ではないが、高塚会長の挨拶の中で、高齢者虐待の問題にふれていたが、最近のニュースでは育児放棄など、子どもの虐待についても大きく取り沙汰されている。

都会のことだけのようにも思えるが、能美市でもそこまでいかないまでも、それに近い事例があるのか、喜多さんに聞きたい。

喜多：ファミサポに依頼してくる母親の中には、育児放棄までいかないが、「我が子をかわいいと思えない」という声を聞くことがあった。ファミサポ以外にも子育てに関わるいろいろな機会の中でも、そういう方は現にいて、AP委員会でもこの話題を取り上げた。

家庭や社会が、少しずつ、壊れてきているのかもしれないが、根本は「本能」が失われつつあると思う。個人的な思いを含めて言うと、「本能」を育ててもらっていない人たちが、親になっているから、「母性」が育っていないのかと思う。

「本能」を育ててもらっていれば、我が子を理屈抜きでかわいいと思えるが、今、お母さん、お父さんになっている人たちは、「本能」を出すことを抑えら

れて育って来ているように思う。「我が子がかawaiiと思えない人」に、「我が子ならかawaiiのが当たり前」といくら批判しても、どうしても無理があるので、まわりの人が、何かしら、支えになるような関わりが必要である。ファミサポは、単に、サービスということではなく、人との関わりの中で心を通わせ合って、そこから支え合いの気持ちを広げていくきっかけであることを AP 委員会でも確認しているし、ファミサポの会員においても、関わりの中から心が通い合うようになり、気持ちにも余裕が見られ、少しずつ良い関係が築けて来ている事例もある。

村上：喜多さんの話を聞いて、子育てのことは、周りからみれば小さなことかもしれないが、すごく大事なことだと思う。各町会に地域福祉委員会の設置が進められている中で、今まで気付かなかった課題が少しずつ気付くようになり、解決に向けてみんなで話し合っって良い方向に進めているように感じた。

私もある保育園での話を聞いたことがあり、子どもは、母親の前では、すごく良い子にふるまうが、母親から離れた保育園では、いたずらや喧嘩が絶えないと聞いたことがある。親が生活に追われ、ゆとりがないことから、子どもに対し、怒りっぽくなり、子どもは親に怒られたくないばかりに家では気持ちを抑えて保育園で発散するということである。

やはり、子育てする親にゆとりを持ってもらえるような協力をどんどんしていかないと、子どもがかawaiiそうである。将来、親になる子ども達のためにも、今から少しずつできることから進めていければと思う。

高塚：喜多さんの言われる育児放棄・子どもへの虐待の問題もあり、高齢者については虐待の問題もあるが、家の中が、足の踏み場がなく乱れていて、不衛生な住環境で生活している高齢者世帯がある。そんな方へ、いろいろなサービスを勧めても、拒否される場合もあり、そんな時は、どのように対応したらよいか、本人の意思でそのような状態にいるのだから、そのままにしておくのかという難しさがある。やはり、本人の心の奥底にある思いを汲み取りながら、人として、最低限の生活を送る意義を伝えて、その人らしく豊かに暮らしていけるよう、その方の子ども・親族をはじめ、周りの人が、手を差し延べられることが大切である。そういった人の思いに気付いた人から、少しずつ、助け合いの輪を広げていくことも必要だと思う。

西川：喜多さんの話で、ファミサポのPR活動を委員会のみなさんで手分けしてされているということだが、ボランティアセンターのホームページでPRなど協力できると思う。

高塚：ボランティアセンターのHPだけでなく、各町会の地域福祉委員会でもよく知った方がいれば周知していける。先程、井上さんが言われた地域福祉委員会活動をどうしてもいかわからないというところに対しては、例えば「ファミサポ

などのサービスを利用した方が良いのではないか」という方を、どう、掘り起こしていくかということが役割ではないかと言える。

西川：地域福祉委員会Q&A集が作成された際にも、比較的、若い世代に限られるかもしれないが、HPに載せて周知していくこともできる。ボラセンづくり委員会では第4回の委員会から、そのような協議をしていけると思うので、他の委員会との連携もできる。

喜多：若い世代の方は、インターネットなどで、直ぐに情報をキャッチするが、その部分だけで判断し、その先に進まないマイナス面もあるのではないかと。情報を得る入口として、その先に進めるよう興味を引く工夫は必要であり、アクセスして、そこで殆ど知ることができると、その先に進まず、人との関わりもそこで切ってしまいかねない。やはり人との接触の機会を得ることは大事である。

高塚：細かい情報を多く載せることで、本当が知りたい部分をキャッチできないこともあり得、検索の仕方も人によって違う。

西川：各 AP 委員会でHPに載せたい情報を協議してもらい、ボラセンづくり委員会に伝えてもらえればと思う。

高塚：社会福祉協議会ホームのHPの情報とのバランスのこともある。

田中：地域福祉委員会が動かないという話が、先程、あったが、私の住む泉台町も当初はそういう傾向があった。今年度の重点地区地域福祉委員会となって、現在は、地域の実情を知る手段として、住民流支え合いマップをつくっている。その中で、地域のことをいろいろ話し合い、課題が見えてくるので、1つの方法として進めてみてはどうかと思う。

吉田：西任田町も昨年度から、支え合いマップづくりに取り組んでいて、本当に支えが、必要な高齢者2人世帯が、1軒あった、今年の4月にその家のおばあちゃんが亡くなり、おじいちゃんが、1人暮らしになり、去る7月に自宅で1人で亡くなっていた。

地域福祉委員会では、そのおじいちゃんが、亡くなるまで地域福祉委員会でどう支援していくか、また何か異変があった場合の対応として、新聞配達、配食サービス、近所の見守りなどについていろいろと話し合っていた。そのため、死後であったが、翌日には、発見でき、地域で支え合うネットワークが大事だとあらためて実感した。

また、いきいきサロンは、町内のいろいろな情報が集まる場所なので、担い手になっている方が地域福祉委員会に入ってもらうことが良いと思う。

高塚：いきいきサロンに参加していない要援護者や男性の参加者が少ないと思うが、そういった方の情報は入ってくるのか。

吉田：そういった方の情報はあまり入ってこないなので、なるべく参加して欲しいが、なかなか、難しい課題である。特に男性の方には畑作業や趣味活動を採り入れて誘うなど、考えたりもしている。

井上：民生委員の立場から言うと、地域福祉委員会は、町会長が、理解し動かして行こうという気持ちにならないと、なかなか動かない。町会長も、1年2年で代わることが多く、難しい面もあるが、やはり町会長の理解がある町会が、実際に活動していると思う。

田中：本来は、町内の住民の福祉のために町会があるので、町会長に関心を持ってもらうことは、大事なことである。

### 3. 今後の予定について

事務局：平成22年度能美市地域福祉活動計画推進スケジュールという資料を参照してもらい、8月までの経過をふまえて、活動計画推進の中間報告、年度報告について検討してもらいたい。あわせて、前回も話が出されていた、今年度の能美市社会福祉大会と能美市民ボランティアフェスティバルの同日・同会場での開催について、地域福祉活動計画の啓発と周知という意味で、少し市民に働き掛けることはどうかという提案へのご意見をお願いしたい。

高塚：特に中間報告という形にしないで、昨年度の評価などをまとめたものを市民に手にしてもらおうというようなことを少し話し合ったのではなかったか。

事務局：前は、計画の冊子を設置したり、模造紙に活動計画の経過やAP委員会の取り組みを表したものを掲示したが、掲示だけで良いのか、そこに説明する人を配置するのが良いのかというところまで話し合っている。

井上：説明する人を配置してもどれだけの人が聞いてくれるのか、あまり期待できないのではないか。

事務局：掲示物をそばを通りかかった方が「なんや？」など、ちょっと気にかけて目にかけていくようなイメージかと思っている。

西川：何人の人が関心を持つのか、それも興味があるので、説明者を配置するのも良いかもしれない。

高塚：ファミサポとして、何か周知するものはあるか。

喜多：特に委員会で話し合っていないが、ファミサポだよりがあるので、興味を引くように工夫すれば、子育て世代の方は、手にとってくれるかもしれない。

高塚：市民が求めるものを、どう、ピックアップするかが重要になる。

事務局：例えば「ファミサポや地域福祉委員会とはどんなものか?」「どんな活動をしているか?」がわかるような掲示物ならばどうか。

高塚：人づくり委員会は、「何かを見せる」というのは難しい。むしろ、何らかの行動をして、人づくり委員会を見せることになる。

ボランティアフェスティバル（以下、「ボラフェス」という）実行委員会の事務局（社協）から提案されていることがあるが、ボラフェスに参加する障害を持った方をサポートするというのを、人づくり委員会として考えており、次回の委員会で協議する予定である。

喜多：大きなイベントで掲示物を、参加者がじっくりと見るということは、あまり期待できない。あまり、関心のない人を引き付けるには、文字による説明より、絵とか写真をメインにしなければ難しい。経過報告というより、ちょっと見てわかるようなしかけだけで良いと思う。

村上：ボラフェスに関して、会場の人の流れを見ると、掲示物には、なかなか人は、止まらず、どうしても体験や食べ物コーナーに流れていく。だから、内容全部をわかってもらうものを掲示しても無理があると思う。  
何か、1つでも知ってもらおうという意味で、目を引き、一目でわかるような内容の方が良い。

事務局：例えば「ファミサポを知っていますか?」という設問に対し、「知っている・知らない」にいずれかに○を付けてもらい、まだ、「知らない」と答えた方に対し、コメントするようなイメージではどうか?

村上：そのアンケートに答えてくれた方に、何か、景品をあげるなど、興味を引く工夫があっても良い。

事務局：活動計画を説明する掲示物の前を通りかかると、何かしら関わってもらえるような工夫、例えばスタンプラリーのスタンプを押す場所にするなどか。

吉田：ただ知ってもらっただけでなく、景品などで楽しみを持たせることは良いことだと思う。

事務局：ご意見をふまえて、事務局でまとめてみる。

高塚：次に、今年度としての市民への報告をどういう形にするか。

事務局：昨年度は、まなびフェスタの分科会と重ねて、そこから1週間という期間を設け、「ちいきふくしウィーク」として開催した。

今年度のまなびフェスタは、2月最後の日曜日に開催することがすでに決まっており、市生涯学習課から社協へ参加についての声掛けがあった。

高塚：先に話し合っていることとして、昨年度同様、人づくり委員会では、まなびフェスタの1つの分科会に参加する予定である。昨年度のウィークは、好評であったが、もしも、今年度も同じような形で開催するとしたら、期間的には、年度の評価・まとめの時期がなく、報告の機会は、むしろ、まなびフェスタの前の方が良いのではないか。

事務局：そこで提案であるが、7月26日に社協主催の福祉協力校活動連絡会で日本福祉大学准教授の原田正樹さんの話を聞いたが、「大変わかりやすかった」などの声が多く好評であった。能美市での講演の後には、県社協主催の「福祉教育セミナー」にも講演され、県内他市町の方にも大変、好評であった。そこで、また、能美市で講演を頂けないかと原田先生に打診をしたところ、来年の2月18日・19日であれば、予定できるとの返事を頂いた。今年度の年度報告の機会に原田先生に講演頂くのはどうか。

高塚：原田先生は、学校関係者やボランティアの方など、ある程度、福祉に関わったり、すでに活動に取り組んでいる方を対象にするのであれば良いが、一般の方を対象にした場合はどうなのか？

西川：確かに関係者や活動している方に対する内容で話されたが、一般の方や「これから・・・」という方も含めた内容で、講演をお願いできるのではないかと思う。ただ、どういった方を対象にするかがポイントで、今回は、AP推進協議会として、講演依頼することで良いのか、どうか。

事務局：昨年度は「ちいきふくしウィーク」という1週間の中で、毎日、プログラムがある形で好評であったが、毎日一週間という期間ではなく、もう少し、期間の幅をとったらどうか。

その中で、何日かに、プログラムを入れるなどにするということで、今年度は、報告の機会としての期間をどうするかを協議してもらいたい。

西川：例えば、原田先生にきて頂く日を2月18日か19日にして、まなびフェス

夕の2月27日を最後とするような、10日間位にするとわかりやすい。

事務局：原田先生には、一般の方を含め、間口の広くした内容で、講演依頼することをこの場所で、みなさんから了承してもらえらるなら、原田先生の2月19日を皮切りにし、2月27日のまなびフェスタを報告の最終日とするということで、いかがか。

各委員：了承

高塚：それでは、各AP委員会で年度報告の企画についても、次回の委員会から、少しずつ、協議を進めてもらいたい。

・各 AP 委員会の今後の予定

＊地域福祉支えあいのしくみづくり委員会

・・・9月8日（水）午後1時30分～ 辰口健康福祉センター

＊地域福祉人づくり委員会

・・・9月14日（火）午前10時～ 寺井地区公民館

＊私たちのボランティアセンターづくり委員会

・・・9月15日（水）午後7時30分～ 寺井地区公民館

＊地域福祉ネットワークづくり委員会

・・・9月22日（水）午後7時30分～ ふれあいプラザ

4. その他

次回 開催日

日時：平成22年10月28日（金）午後7時30分～

会場：辰口健康福祉センター

5. 閉会の挨拶

西川 AP 推進協議会副会長

今朝の新聞記事で「地域福祉計画」について書かれていた。石川県内の自治体の策定率が26%となっていて、決して高くない数字に驚いた。

能美市では、地域福祉計画、それを受けて地域福祉活動計画が策定されており、また、それが、最初からきちんとできているものではなく、自分たちでいろいろと積み上げて形づくってきている感があり、このわたしたちのやり方は、これでよかったのだと思っている。

何が、地域を進化させていくのかと考えると、やはり地域に住む人の心のありようだと思う。お互いに助け合っていくことが大切だという心のありようが、地域福祉計画、地域福祉活動計画の根本である。本日も有意義な話し合いができたと思う。また、年度末のまとめに向けて、みんなで協力していきたい。